

学びの灯

ようこそ、広島都市学園大学 子ども教育学部へ

子ども教育学部には、様々な研究をされている先生方がいらっしゃいます。

このページでは、毎月、一人一人の先生方の思いや考え方などを記していただき、読んだ皆さんの心や頭に「学びの灯」をともします。

一つ一つの「灯」は、いくつか集まると、きっと大きな明るさとなり、皆さんの未来を明るく照らすものとなるでしょう。

また、ある「灯」は皆さんの拠り所となって、どんなときであっても、希望と温かさを保ち続けてくれるでしょう。

さらに、皆さんが「新しい灯」をともし、多くの人々の未来を明るく照らすことに役立つことでしょう。

さあ、今月は、どんな灯でしょうか？



美術教育・造形教育の明日の担い手を

子ども教育学部 「図画工作」等担当教員：國清 あやか

私たちが、小学校・中学校で当たり前のように受けてきた図画工作や美術の授業。ちょっと思い出してみてください。あなたは、好きでしたか？嫌いでしたか？何のために図工や美術が学校教育の教科として位置づいているのだと思いますか？

学生に問いかけてみると、「確かに、受験科目ではないし、楽しかったけど、どんな力がつくのか、よくわからなかった。」「楽しくて息抜きの教科だった。」「絵が下手だったから、面倒だなと思っていた。」という正直な答えが返って来ました。

作品の結果であるできばえで評価されてきた学生は、「上手だったから好きだった。」「下手だったから嫌いだった。」という反応をします。上手な作品とはいったいどんな作品なのでしょう？誰の価値観で、評価されているのでしょうか？美術教育における評価は、決して上手下手でランク付けされるものではありません。

また「楽しくて好きだった。でも、どんな力がつくの？」という疑問も多く聞かれます。ただいま学生と、表現や鑑賞の活動を通して、その答えを模索中です。

一つのテーマで作品を創っても、一つの作品を鑑賞しても、学生の数だけ、答えがあります。十人十色、「みんなちがって、みんないい」。感覚と心と脳をフル回転させ、手や身体を駆使して、色・形・材料を選び構成し自己表現できること。作品の造形要素をもとに自分なりの意味をつむいで鑑賞できること。これが、図画工作科や美術科の教科の特性です。

学生から「想像力を発揮できる」「感性が育つ」という美術教育の本質を見据えた言葉を聞くようになりました。また、友達の作品を鑑賞すると、「〇〇さんらしい」「自分では思いつかなかった」「センスがいい」という他者評価の言葉が聞かれます。自分とは違う価値観や個性を認めあう力を育むことのできる教科でもあります。

「楽しくて好き」なだけでなく、人間形成に寄与する美術教育の担い手として育ってほしいと願い、学生と日々向き合っています。